

い
ま
風
火曜日

氷点下十度を下回る厳冬の朝、午前三時に起床し、スパイクタイヤをはいた愛車のスカイラインGT・ESターボに乗りこみ、八ヶ岳山麓の松原湖まで約二十分。

車のトランクに積んだままの釣り道具を子供用のソリに載せ、懐中電灯の灯りを頼りに雪の積もった氷上に出る。

あらかじめ決めておいた場所にドリルで直径十センチほどの穴を開け、水面に浮いてくる細かな氷を天ぷら揚げに用いる網ですくい、釣り糸を垂らす。懐中電灯の光は竿先と水面を照らすのみで、周囲は漆黒の松林に囲まれているが、星空がすぐそこにあるので気分は安らぐ。

紙やすりで細く削った塩化ビニール製の竿先に微かな当たりがくると、六メートル余の糸をたぐり、体長三センチばかりの小さなワカサギを得る。夢中で釣っていると、空がいくらか明るくなってくる。もともともよく釣れる時間帯だが、腕時計で六時三十分を確認すると、竿をしまふ。

そのまま勤務先の病院に直行し、釣ったワカサギは密閉容器に収め、医局食堂の冷蔵庫に入れておく。そして、八時からおもむろに病棟の回診に向かう。

南木 佳士 作家

能力過信は健康損ねる

もちろん、あらかじめ病棟に重症患者さんがいないのを確認しておいての釣行だが、この若造医師は冷蔵庫のワカサギを家に持ち帰って妻に天ぷらにしてもらい、それをおかずにはんの十分ほどで夕食を終え、自室にこもって深夜まで小説を書き、翌朝はまた三時に起きていた。

世間はバブル景気に沸いており、財テクということばが飛び交っていたが、株や投資にまったく興味のない身には無関係な騒ぎだった。しかし、いまになって、ああ、あのころは内なるバブル時代だったのだなあ、と気づく。

身の内の限られた資源を短期間に使いまくり、それが「わたしの」の平常の能力であり、この時代がいつまでも続くのだと錯覚していた。電力消費が過ぎてブレーカーが落ちていたはずなのに、故障していたか、無意識のうちにブレーカーそのものをはずしてしまっていたのだった。

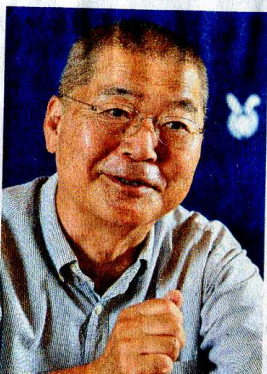
バブルが弾けるとともにう

つ病に陥り、氷上の釣りには行けなくなった。

再開はそれから十五年ほどのちだが、専用のテントや暖房器具、カローラに乗る妻の付き添いが必要だった。やがてこの夫婦は氷点下二十度近くになる二月の松原湖の寒さに耐えられなくなり、スーパーマーケットのワカサギで天ぷらを揚げようになった。

これで充分だったのだ。ぬる燗の地酒二合を妻と分け合って呑む週末、マナーを知らなかった氷上釣りのころを語りあいながら、それがほんとはあったことなのかよく分からなくなる。そして、間もなく起きる出来事の予行のふいふい眠ってしまう。

氷上釣りのマナー



SELFISH.

なぎ・けいし 通勤路の雪が消え、軽登山靴からスニーカーに履き代えた。軽くなったぶん、足首の固定が不安定になった。何かを得れば何かを失う。そんな小賢しい思いとは無関係に、帰路の正面にそびえる真っ白な浅間山はこのところ明らかに噴煙の量を増している。